

## キエルケゴール『死に至る病』を読み解く(Ⅲ)

辻 厚 治

(2) 「自己とは関係ではなく、関係がそれ自らに関係するということである」とは？

Ⅲ、「関係がそれ自らに関係する」ということについて

第2章のⅡ、において『となりのトトロ』のメイを通して、人が成長するようになる時点においてか、イ、自分自身を上から見下ろすような位置に視点を移すことができるだけでなく、ロ、自分自身から離れた他者の視点から、自分の身体像を想像することもできるようになる、ということの小浜逸郎の『大人への条件』のなかの言葉を借用しながら指摘しました。そして私たちはこうした視点を持つつつ、そのつど自分自身の立ち居振舞いを決めて生きていく(在り方を選択する、ないしは態度決定している)のであり、さらにそのことが即ち、キエルケゴールが言うところの「関係がそれ自身に関係する」ということなのだということも指摘しました。そしてこうした在りよう、構造をさらに具体的に、詳しく展開していく場所として「この病の(絶望の)諸形態」があります。そこに出てくる絶望の「形態として指摘されている」「有限性——無限性という規定下に見られた絶望」の例え話として、ある少年の物語(イギリスの作家、フィリパ・ピアスの『まぼろしの小さい犬』)を問題にしてみました。それは、人間は二つのものの関係をそれとして生きるように規定されているにもかかわらず、有限なものの世界において傷つけられ、絶望させられたがゆえに、その世界にできるだけ関わるまいとし(無視し)、無限なものの世界にのみ生きようとする例えとして格好の話でした。

こんどは逆に、有限なもの(地上的な何か)の世界に囚われるあまり、無限なものの世界からの手痛いしっぺ返し(二つのものの関係を無視して生きよう、伸びようとする)ができないにもかかわらず、無視しようとした結果としてのそ

れ)を受けざるをえなかった少年の話为例として出し、「関係がそれ自身に関係する」ということの中味をもっと私たちに引き寄せ、具体化してみたいと思います。

一九七七年一〇月に、開成中学校という全国レベルの受験校で、それまで彼が生きてきたところであった「小学校で一番だった」という自信と誇りが跡形もなく消えさり、自分を支える術をどこにも見出すことができなくなった一六歳の少年が、その苛立ちのあまり家庭内暴力を振るうようになり、手に余った父親から絞殺されたという「開成高校生殺人事件」といわれるものが起こりました(この事件は既に「吾がうちなるユダ」と題する論文<sup>2</sup>で取り扱っています)。今からおよそ三〇年も前の事件ですが、その後起こったさまざまな事件・出来事の問題性を象徴的に現しているように思われますので、ここで改めて取り上げることにします。

父親から殺された少年Aは長男で一人っ子でした。両親と母方の祖父母という四人の大人に囲まれて育てられたとすれば、多かれ少なかれ甘やかされ、「ちやほや」され、わがままは自然聞き入れられていくという具合だったでしょう。しかしこれは、現代社会に多い「一人っ子」状況のなか、Aを取り巻く大人たちがことさらに極端に甘やかしたということではなかった。父親は供述書のなかで、事件当夜、家庭内暴力のはてに疲れ寝込んだAの枕元で(首を絞めようと)下帯を手に正座しながら、どんなに木枯らしが凍てつくように吹きすさばると、それを思い浮かべただけで心温もるあのあどけなかつたころの笑顔、「また一番だったよ」と満点の答案を持って息せき切って駆け込んだきた小学校のころのAの得意げな顔など、いろいろな場面とそのときのさまざまな思いとが脳裏をかすめ、どうしても手が出せなかつた、しばらくの間、どうしてこんな子どもになつてしまっ

たのだろう、かわいそうだなあと不憫でしかたがなかった、思い悩んだ、と述べています。

また、母親は、検事の「Aが小学生という、ちょうど遊び盛りのころなのに、勉強が好きだとか試験が好きだとかいうのはおかしいことと思わなかったか」という問いかけにたいして、「(私自身も子どものころトップだったから、特別おかしなことなどは)思わなかったです。みなさんもやっておりましたから」と答えている。このことはあとでまた問題にするとしても、トップであることを当然のことのように生きてきた自分自身のありようが、結果的には、A少年を追い込むことになったとは露ほども思ってみたことがない母親の言葉、さらには裁判の過程で「あなたは私の生きがい奪ってしまった」という夫を一方的に責める遺書を残し自殺していった母親の振舞いと、みずから手をくだしたがゆえに、これまでのAとの生活がなんであつたのかを否応無く省みざるをえなくなった父親の言葉、その悲痛な重さが非常に対照的に浮かび上がってきました。

確かに、両親ともAに対して勉強を強制したようにもみえないし、それはまた供述調書などのなかで練りかえし述べていることです。彼らはむしろ、がりがりと目の色変えて勉強することはないと一方で考えながらも、「子ども自身のため」と思って「勉強」を「世間並みに」勧めるような、ごく一般の親だったという。だがしかし、「試験」や「勉強」が好きで、「トップであることを至極当然であるかのように考えている」母親を喜ばせようと、結果報告に家へ駆け込んでくるという日常の集積として、「小学校のときから友人ができず、また本人も欲しいようなことを言わなかった」というA、したがって、授業中に欠席しても近くに座っている同級生が気づかない、「まるで印象のないという感じで」しか受け取られていなかったA自身が形作られてきたのではないのでしょうか。

父親はAに「世間並み」に家庭教師をつけ、躰も「世間並み」に、その将来についても「世間並み」にと考えていたという。また一番控訴後、「息子のところへ行きたい」と喪服を着て自殺した母親は裁判長あての手紙のなかで、「子どもも進んで勉強し、進学テストでよい成績を上げて喜んでおりました。そんな息子をみて、協力し、いくらかの期待をかけたことが罪なのでしようか」と語っています。確かに、世の親なら誰しも、こうした期待を子どもにも多少なりともかけるであろう。また私自身、これに類する親の言外の期待をどことなく重荷だと感

じてきながらも、なおかつ自分の子どもに同じような期待をかけていないなどと断言することができないとすれば、こうした「世間並み」という期待がAにとって、どれほどに重く煩わしいものであつたかに最後まで気づかなかつた両親であつたとしても、批判の矢を放つことは心苦しいことである。できれば、時間の流れのままに任せておきたいけれど、私たち自身のなかにあるこうした「世間並み」という破りがたい壁を破ることなくして問題が一步も進まないのであれば、それに立ち向かつて行けるところまで進んでいくほかないであろう。

Aは小さい頃から両親に叱られるようなことをせず、また心配をかけるようなこともなかつたという。いわゆる、手のかからない、いい子だつた。近所にあつた私立の幼稚園を出ると、私立の小学校へ通つた。電車通学ですし、部屋にこもつて勉強ばかりしていたという彼には当然のこと、帰つてからいっしょに遊ぶような友だちができるはずありません。確かにこれは、両親が彼をそのようにしむけたというわけではなく、部屋にこもつて勉強ばかりして遊ぶとしない彼をできるだけ外へ連れ出そう努力としたのだと、父親は証言しています。でも、電車通学をして小学校に通うということ自体が、友だちと外で遊ぶこともなく勉強ばかりしているというA自身を作り出すことになつたのですから、そこをなんとかしないことには、忙しい時間を割いてのせつかくの連れ出し遊びをしてもただそれだけで終わってしまうのではないのでしょうか。

外に出ない、友だちを作れない等といったことは、他の誰でもないA自身がみずから選んだありようであるとしても、ここには明らかに、このような形での「いい子」に育てあげようとしてきた両親、とくに母親の意図を感じないわけにはいかない。こうした期待、意図を受け、Aは「全員が私立の中学校に受験する」という私立の小学校へはいり、「試験」や「勉強」が好きで、午前二時頃まで机にむかい、成績はいつもトップでした。五、六年生になると週二回の家庭教師につき、日曜日には進学塾へテストを受けに行く。「学校としては、開成以外に行く気はない。開成は自分に合った学校だ」と考えていた彼は、三〇〇人中五六番で合格します。

中学二年生の夏ごろまではクラス一〇番前後だったが、学年の終わりがらから授業についていけないために成績が落ち始め、気持ちは当然のこと焦り、苛立つてきます。このときの彼について父親は「他(父親)から見て、態度や母親にた

いする言葉遣いにそれが出てき、三年のときには、「自分の部屋に閉じこもって、哲学やフランス文学の本などを読んでいた」と供述しています。開成は中高一貫教育ですから、中学校のカリキュラムは三年生の夏休み前後ぐらいには終わらせて、高校課程に入っていくというシステムになっているといわれています。だから、普段の授業の復習・予習などに時間をかけ、しかもよほど手際よくすすめていかないと、毎時間ついていくのは大変なはずですよ。しかもそれを毎日、すべての教科でこなさねばならない。従って一旦こうした流れから脱落すれば、追いつくのはとても不可能だといってよいでしょう。まして授業と全く関係のない「哲学やフランス文学の本などを読んでいた」とすれば、成績は下がる一方のはずです。同級生はAについての印象を、「授業中もうつぶせになっていることが多くて、あんまりノートなんかとっていないみたいだった」と、語っています。授業についていけないから「うつぶせになる」しかなかったということも勿論ありますが、この時点での、「学校の勉強」とは別の「自分を研ぐ勉強」の方へ惹かれていくという、後に取り上げる彼の発言からすれば、学校の勉強になんの魅力も感じることができないから、「うつぶせになる」以外仕方がなかったのだろうと思います。まあまあその学力をつけていて、受験のためにそこそこ勉強をすることができると同級生たち、彼らに受験のノウハウを熱をこめて語ってきかせる教師に軽蔑と憎悪をふつふつと募らせながら。

事件の後、開成高校生を集め、座談会をしたときの記録が本多勝一編『子供たちの復讐』（朝日文庫）に載っています。そのなかである高校生が次のような発言をしています、「この間の事件（開成高校生が病院で看護婦に切りつけた事件）にせよ、二年前のAさんの事件にせよ、要するに勉強のことが問題になっているわけなんです。自分もそうだったんだけれど、塾通いをした小学生のころから、勉強する生活に慣れていきます。これがひっくり返ると、生活が勉強だけになってしまいます。うちの学校自体がそれに慣れてしまつて、やっぱり成績重視だ。最初よかった成績がどんどん落ちていくと、ああいうケースが起きてても不思議ではないのではないか」、「成績が落ちるぐらいにしたいことないんじゃないか」という意見もあるけれど、子供の頃から勉強が生活の中心にあるわけですから、そうした人間にとっては、たかだか成績が下がっただけ」とは言えなくなってくるわけで、「成績がだめになると、結局自分の生活全体に対する疑問として

ハネ返ってくると思う。五番が十五番になると自分の将来が真っ暗になるとか、そういうことはないにしても、やはり成績が下がってみると、自分は一体今まで何をやってきたんだというふうなことを考え出してしまうことになる」と。こうした言葉は、成績の良し悪しにかかわらず、また、「なんのために勉強するのか」という疑問や悩みを、いわゆる気晴らしや遊びによって解消しえたと思っ

ているかどうかにかかわらず、今日の「勉強競争の時代」に呑み込まれざるをえない多くの子どもたちの気持ちを代弁しているものといえるでしょう。まさにここで述べられている「生活が勉強だけ」といった毎日を送ってきたAにとつて、彼の自信と誇りの支えであった「成績」が下がるといふことは「自分の将来が真っ暗になる」ことを意味したし、「これまでの勉強一途の生活が一体なんのためだったのか」という「自分の生活全体に対する疑問」として即跳ね返ってくることになりました。俺の人生はいつたいたんだったのか。いちばん遊びたい盛りになだ机につき、毎日夜の二時まで勉強ばかりしていた。さらに週二回は家庭教師につき、日曜には進学塾にテストを受けにいっていた。遊びも、趣味も知らず、ゆつたり安らうことの楽しさも味わうこともなく、一切を犠牲にしてきた過去はなんのためだったのか。今までみたいに成績によってみずからを支えられないとは分かっていても、では一体何を支えとして立ったらいいのか、皆目見当もつかない。こうした疑問が次から次へと湧きあがってきた。

ところが、こうしたことを本音で話し合える友だちも大人も、周りには誰ひとりとしていなかった。あるのはただ、胸の中を渦巻く空虚な思いと、こんな残酷・無残な思いをかかえて生きるほかになくした周りのあらゆるものへの憎悪だけ。このとき彼のなかを渦巻いている、自分自身を含めた全てのものへの苛立ち・憎悪について、祖母は次のように証言しています、「Aは学校から帰ってきてきて玄関に入ると、すぐ大泣きをするのです。どうして泣くんですかと聞くと、外で殴ったり殺したい気持ちをやっと抑えて家までくるので、悔しくて泣くのだ」と言つて、一時間くらい大声で泣いているのです。それが終わると、大声で叫んだり、物を壊したりするのです」と。しかし、こうして外で我慢し、自分を抑えてきた分、帰ってきて肉親に当たり、物を壊す。でもそうした形で発散させたとしても、気持ちは少しも収まりはしない。かえって募るばかりだと言っている。ただ、暴れまわれば身体的には疲れますから一時的に収まったように見えます。でも、

基本のところではなんにも変わっていないのですから、また、同じようなことがなんども繰り返されるわけです。

これまで、「私がここにこうして在り、その私が勉強する」なんて問題にするまでもない、まったくの当たり前のことだった。その私に勉強する気力がどこからも湧いてこない。ここにこうして在ることすら、ふらふら、ゆらゆらして、まるで掴みどころがない、きちっとこれだという形で定まらないのです。もう苦しんで苦しくて、生きているのが辛くて辛くてたまらない、助けて欲しい、もうこれ以上苦しめないで欲しいと願ってみても、この苦しさ・辛さ、惨めさ・掴みどころのなさはないにしても止めることができません。こんな自分が厭わしい。こんなに惨めで、嫌な自分をきれいさっぱり消し去って、昨日までのような輝く自分に出直せたらと思うものの、それができないことだという無力感が、不甲斐なさがさらに自分を落ち込ませていきます。まさに底なしの絶望のなかにあったのです、彼は。

彼を支えてきた「勉強」ができるという自信と誇りが壊れたいま、なにを支えるにして立つたらいいか皆目見当がつかない。まさに右も左もわからぬ真つ暗闇の大海に一人ぼつんと漂う遭難者よろしく、これまでのように教科書・参考書などによる手がかりを一切求めることができないという初めての経験、みずからの生命をかけて独力で解くほかない、もつとも大切な人生への問い——なにを確かな支えとして生きるか——の前に素っ裸で立たされたのです、逃れることができない状況として。

Aはいわば、「小学校で一番だった」という自信と誇りを支えにこれまで生きてきました。これがあつたからこそ、これを支えに胸を張って生きてこれたのです。これまでのような、「私が普通にご飯を食べることができ、学校に行けて、勉強をすることができるといふエネルギーはどこから、どのように出ているのか」、もつと別な表現をすれば、「私自身の本当に確かな支えはどこに、どのようにあるのか」という肝心要の疑問を解くことなしには、どうにも動きがとれない、進めないというように、自分でもどういふことなのか分からぬままに追い込まれていきました。これまで本物だと思つてやってきましたが実はそうではないという感じがしてきました。こうして「哲学やフランス文学」に出会うべくして出会ったのです、誰という導き手がなかったにもかかわらず。

このときのAの切羽詰った状態を、あちこちに散在する彼自身の言葉から読み取ることが出来ます。たとえば、「友だちができない。内向的である。突然意味もなく暴れたり、乱暴したりする」ということから、両親にノイローゼ・精神異常だと疑われたAは精神病院に連れて行かれたあと、手近にある襖やガラス窓を叩き壊し、とめようとする母親祖母に殴りかかりながら、「俺の夏休みを返せ。青春を返せ。おれの人生は破滅だ」と叫んでいたという。また通っていた精神科の医者に、「勉強にはふたつある。ひとつは学校の勉強で、もうひとつは自分を研く勉強。学校の勉強は一応やっておけばいい。いまは、学校以外の勉強に魅力を感じている」と語り、カウンセラーにたいしては、「我慢しきれないほど苦しいが、死ぬことも出来ない。仕方がないから生きてゆくんだ」と言っていたとい

います。<sup>13</sup>でもまさに、有限なもの(地上的なもの)の世界のみが確かだとし、そうしたことに露ほども疑いを抱いたことなど一度もない——Aがこれまで自分を支えてきたものについて疑いの目をむけはじめ、哲学やフランス文学の本のなかに、これまでとはまったく違った何かを捜し求めて苦しみ、悩んでいるにもかかわらず——母親は「トップであることを至極当然のことである」かのように考えつづけ、そのうちまた元に戻つて「勉強」をしてくれるだろうと思つていた、と供述しています。そしてそのとき、そう思つていただけでなく更に、欠席しがちなAに「学校を休まないように」と注意したり、Aが気分良さそうにしていたので「勉強はしているの?」「大学はどうするの?」など声をかけたりして励ましたとい

います。<sup>14</sup>自分でもはつきした答え・方向性が出せずに窮地に立たされている、悩みに悩んでいるそこをことさらに抉りだし、突きまわるような形で母親が衝いているのです、「あなたのためを思つて、聞いているのよ」と善意そのものの顔をしながら。このときAは、暴れ、泣き喚き、あたりを叩きまわる以外に一体なにができるたというのでしょうか。このように言つと、あまりにもAに身を寄せて物事を見過ぎるくらいがあると、あなたは私を非難するでしょうか。

母親のこの発言を契機に彼は部屋にこもつては泣き喚き、あたりを叩きまわり、はては母親を「殺してやる」といっては追いかけてまわるまでになっていった。さらに乱暴はエスカレートしていき、事件が起きた一九七七年には祖母の大切に

ていた仏壇をバットで叩き壊し、包丁を持ち出して父親に差しかかり、はてには皿で父親の頭を叩き入院させるまでとなり、A自身はパトカーで精神病院に強制入院させられたと言われています。

こうした暴力の数々と、それになす術もなくただ曝されて、果てはみずからの手でひとり息子の首を絞めるまでに追い込まれていく父親の姿、また息子の暴力の直接身に及ぶ危険性のゆえに「手にかけてよう」と言う父親の言葉に頷いてしまふ母親の姿を見なければならぬのはなんとも遣り切れないのですが、ここで問われているのは両親がいうところの「世間並み」の期待というものの内実、勉強をことさら強制したわけではないというものの「トップであることを至極当然であるかのごとくに思ってきた（思い込まされてきた）」日常の集積としてあったAの生活全体、あるいはもつと言えば、彼を彼として作り上げてきた周りの人間関係、世間といわれるもの自体といつてよいでしょう。いいかえれば、両親を小さい頃亡くしたがゆえに苦勞をしてきた父親は、同じような惨めな思いを子どもにさせないように、子どもの力を伸ばしてやろうと考えた。トップあることを当然なこととして育てられてきた母親の我がひとり息子への「トップであつて当たり前だ」という思い（期待）とが、ここで見事に一致するのです。こうした父親と母親の暗黙の期待は、「開成以外にいく気はない。開成は自分に合った学校だ」といった少年自身の自発的な意志という形をとりながら、実現されてきました。

幼いときから母親の言うことをよくきき、手のかからない「良い子」として育ててきたAが、授業についていけなくなり、学校の勉強への興味を失っていくのです。こうした彼が唯一興味の持てる勉強として「哲学やフランス文学」があった、彼言うところの自分自身を研ぐための勉強として。両親がAを見ているときの力点は、「トップであることを至極当然であるかのように」期待を背に歩いている時点でのAの姿にあります。だから両親には、小さい頃から叱られるようなことをせず、勉強をしていた「良い子」であつたあのAが、「殺してやると」母親を追いかけまわし、父親に包丁を手に刺しかかるまでにどうしてなつてしまったのか、最後までまるで見当もつかなかったはずです。それを象徴的に現しているのが、一審控訴後、「息子のところへ行きたい」と喪服を着て自殺した母親が裁判長宛に残した遺書のなかの言葉です、「子どもも進んで勉強し、進学テストで良い成績を上げて喜んでおりました。そんな息子をみて、協力し、いくらかの期待

をかけたことが罪なのでしようか……」、という。ここにはひとり息子を手にかけた親として、世間の「非難の」眼差しをただ一方的に浴びるほかない夫にたいして、ささやかであつても弁護をしたいと願う妻の姿が確かにあります。それを精一杯考慮したとしても、彼女の主張からは、少年をかくまで追い込んだものが何であるのかへ、また彼がそうしたなかでどこか必死に自分自身を取り戻そうとして足掻いていた、踴っていたことへ、親として思い至りえなかつたという悲痛な思い、自責の念を遺憾ながら感じることができません。

Aは有限なもの（地上的なもの——成績）の世界だけが確かだ、大事だとしてきた、これまでの自分の生活全体にたいして疑いの目を向け始めただけではなく、もうこれでは生きていけない、生命を支えられない、とてもやつてられないから、これまでとはまったく違った生き方を「哲学やフランス文学」のなかに捜し求めて悩み、苦しんでいます。つまり、学校の成績という有限、相対的なもの（地上的なもの）の世界だけを大事として、その世界にのみ囚われてきたこれまでの生活全体を（いわば）投げ捨て、これを超えるもの、時代を超え、時間を超え、有限なものを越え、無限なもの・永遠なもの・絶対に揺るがないものへの探求へと向かわざるをえなくなつていったのです。それが、学校へ行こうとしても自分ではどうにもできない拒絶反応としておこり、そしてまた自分自身へまた周りへの苛立ちとしていちばん身近な母親への暴力という形をとつたと言えるでしょう。

この暴力という形はどう見ても正当化しうるものではないけれど、小さい頃から友だちと精一杯遊ぶことの楽しさも知らず、両親の手をいちばん煩わせたいときにとくに世話をやかすこともなく育ち（あるいはそのように育てられ）、部屋にこもつて勉強ばかりするという「いい子」を演じ続け（演じ続けさせられ）てきたAが、このままでは自分自身が喪失されていくだけだと、身体そのものとして正直に、本能的に、無意識的に反応したと、言えるのではないのでしょうか。次のような、一見理不尽とも見える彼の言葉がこのことを如実に表しているように思われます。「殺してやる」と両親を追いかけ廻しながら、「俺の夏休みを返せ、青春を返せ、人生を返せ」と叫んでいたといえます。みずからの意志で「開成」へと入学しながら、勉強ができなくなつたといつて他人を責め、他人に当たるなど筋違いもいところですが、でも、「トップであることを至極当然のことのように」育てられてきた、また、それになんの疑問を抱くことなく受け入れてきた自

自身を、これまでの全時間をなんとしても取り戻したかった、取り戻さないではおれなかったのです、たとえどんなに理不尽であろうとも。従ってこれは、A少年の全心が正直に反応した結果だと言わなければならぬでしょう。

これまで(二つのものの関係としてそこにあるにもかかわらず)無視され続けてきた無限なもの・永遠なもの・普遍的なものがいつまでも我々を無視することはできないぞと、A少年自身のところに元々ある関係(二つのものの関係としてのそれ)が、存在そのものとして内部から薄皮を食い破って出てきたのだと表現するほかないのです、このまま行くのであれば、絶望形態という、どこまでも暴力と動乱と破壊の道しかないよといった形で。ケルケゴールはこれを「彼がそれであろうと欲しない自己であるように強いられることは、彼の苦しみであり、その苦しみは自己自身を脱け出すことができないということである」と言います。

しかし、生命の源を打ち倒すほどに酷い絶望が私たちをどんなに襲い、打ち拉(ひ)ごうとも、ケルケゴールは同時に、二つのものの関係をそれとして生きるようにという要請、促し、働き(生命のバネ)が自己という構造そのものにあることを指摘しています。だから、A少年はいままでそのままでは自分自身が失われていくばかりだけれども、成績にのみ囚われていたこれまでの自分を越える道が何かここにあると直覚し、それをはっきりさせたいと「哲学やフランス文学」の本を読んでいたのです。これはケルケゴールの指摘するように、絶望という病から癒される道が誰ならぬ私たちひとり一人のところに厳然と存在していることなのよりの証と言えるでしょう。言い換えれば、二つのものの関係をそれとして生きる、いまここにという限定をうけているということにおいて、確かにこれまでの彼のところにおける限定——受験というシステム——に乗ることはできない(したがって、これまでのような自信と誇りを全く失って、どこにも支えを見出せない絶望のさ中にある)にしても、それがただ辛く、苦しいばかりでどこにももう光がない、生きる術がまったく閉ざされているということではなく、彼がいうところの「自分を研く勉強」をすることこそがいまの自分を生かす道だという限定、方向性へと歩を進めることができたのです。

たとえば、A少年が他人と比べどんなに小さくて、弱々しい、劣った力しかなかったとしても、それでも尚且つみずから生き抜く力が現にあり、それによって「哲学やフランス文学」の本を読むことができた。何もする気がなくなった彼が唯一

選びとったというか、選びとらされたというか、この「自分を研くための勉強」をしているときだけはなにはともあれ充実し、力が生き活きと働いたのです。そうした方向性を突きつめるなかで始めて、現在、自分ではどうにもできないように見える、悲惨このうえない絶望でのみ覆い尽くされているかに見える世界が、いつしかきつとA少年において(真に、明るい)未来へ——言い換えれば、時を得て、安堵の息がつけ、身の芯(深)から溢れてくる輝きのうちに、自然に、おだやかな気持ちで力が充実し、生きる勇気が湧いてくる、元氣を出してものを見たり考えたり、ほかの人に親切を尽くしたりすることができるような世界へ——と切り開かれていくはずでした。だから、たとえば、生命を覆い尽くして、歩むべき未来などにひとつ見えないような絶望のどん底にあらうとも、そうした闇ばかりのようにしか見えない、いまここに限定されてあるというそのところに闇の深さを越えて、生き活きと生きることで、また、楽しく、幸せに自分を生かすことのできる指針・道標がすでに、人の思いや業を超えた生命によって与えられてあるんだよというのが、ケルケゴールが『死に至る病』を通して明らかにしようとした核心部分だと言えるのです。

このことを否定するつもりはまったくありませんし、一人ひとりのところに働いている生命のバネ、現実には「二つのものの関係を関係として生きている」といって私たちが「関係を関係として生きるように」と引き戻す力なくして、私たち人間はちゃんと立つことができないというのは、彼の言うようにまったく確かなことなのです。しかし、これまでA少年のありかたを通して見てきたように、私たちはひとりで孤独な格闘をするだけでは、なかなかそうしたことに気づかない。また、開成高校のような受験校に行っていれば、そうした孤独な自分自身が嫌でも浮き立ってき、「一体、俺はこんなところで何をしているのか」という焦り・恐怖・不安などが彼に押し寄せ、彼を包み、すべてを「わっ!」と投げ出し、暴れ周りたくなってくるはず。事実、彼は学校でそうしたいにもかかわらず、そうすることができずに抑えおさえてきたからこそ、祖母の証言にあったように「学校から帰ってきて玄関に入ると、すぐに大泣きをし」(証言によると(二時間ぐらい大声で))、「それが終わると、大声で叫んだり、物を壊したりした」のです。「なんだか、これまでのような方向ではとてもやっていけない」、「どうも、これまでとは全く別な生き方があるようだ」ということによし気づいても、

その肝心の道はどこか漠としていて、なかなかはっきりと姿を現してこない。だから、むしゃくしゃし、苛立ち、周囲へ憎悪の波を撒き散らしてしまうのです。

したがって、「その道はいまは霧のなかを手探りで進むようで定かならず、本当に分かったぞという手ごたえが返ってこないかもしれないけれど、君の人生にとって大事なことがここにあるという見当づけは決して間違っていないから、もう少しここをこなふふうに考えて、歩いてごらん。そうすればある日突然、ああ、私はこのことをはっきりさせたかったんだ、求めていたんだというように、事柄自身が見えてくるはずだから」などと、実際にA少年を後ろから押し、支えてくれる誰か（先達）がいるということがなくてはならないのです。それは同時に、A少年がいまの閉塞状況を切り開こうとして苦闘している方向の正しさを認めるとしても、なかなか姿をはっきり現さない（道）に焦りを感じ、苛立ち、投げ出したくなり、そうした不安感・焦燥感を周りへの暴力という形でしか表現できない彼へ、「それはどう考えても間違っているんじゃない？」という疑問を投げかけることでもありますし、またこうしてじっくりとある一点にむかって考える孤独さがどれだけ大事であるかを示すことでもあります。そしてそれは同時に、いまは全く閉ざされているかに見える両親との話の糸口を探す道でもあった。

もっと厳しい言い方をすれば、「哲学やフランス文学」を勉強するということ——彼が親にむかって不遜にも吐き散らした言葉「お前ら夫婦は教養もないし、社会的地位もないし、そんなやつが一人前の顔をして説教できるのか」——と、一端の口を利くほど偉そうなことではさらさらなく、父親の人生・母親の人生の重さから如何ほどのものを掬い上げうるかという力量・品位が試されることだという論しにもなるはずでした。つまり、二歳になったばかりで父親を亡くし、六歳のときには母親が再婚のために家を出たため弟と二人、料理屋をしていた祖母に育てられたA少年の父親が、どんな思いで戦中戦後の少年時代・青年時代を過ごしてきたか、祖父母の元を離れて単身上京し、米軍基地でコック見習いをし、そこで覚えた職を生かして銀座のバーでバーテンをしながらこつこつと金を貯めて、どんなにして喫茶店と貸し事務支所を開くまでになったか、そこで電話担当係をしてきていた娘と出会い、結婚したかといった話はそれこそそれ自体で文学のテーマであるし、何を大事なこととして生きてきたかという哲学のテーマそのものに繋がっていくはずです。A少年が探し求めていた道とどこかできつと交わ

る事柄でした、彼が本気になって忍耐強く、そこを突き詰め、穿ちさえしていれば。そうすれば、A少年が立ちむかわなければならぬ本当の相手は父親でも母親でもないことに、すぐに気がついたことでしょう。

こうしたことを示唆できる先達が身近に、具体的な形でいるということによって、状況はずいぶん違っていたでしょう、「哲学やフランス文学」の本を読むという、地道に積み上げるしかない孤独な作業も欠かすわけにはないとしても。私たち人間は誰しもどこか欠点、弱点をさまざまに持っていますから、互いに補い合い、支え合い、助け合って、言い換えれば、愛し合って生きるほかないのです。A少年が、「勉強がこれまでのように手につかなくなつた。どうしたらいいだろう」と教師のところへ、あるいはカウンセラーのところへ相談にいったとき、たった一人でもこれまで述べてきたような形で手を差し伸べることができてさえいれば、事態はもっと違った展開になっていたはずですが。これは、もう二度と取り戻すことのできない過去をあれこれと愚痴る結果論でしかないと分かっています、この事件を繰り返し講義で取り扱うたびにいつも私が感じさせられることなのです。

これは、キエルケゴールが孤独なありかたを生き抜くあまり、また人ひとりのところに現に働いている見えざる生命のバネの証明（神の存在証明）に力を注ぐあまり、見逃してしまった重要なポイントであるような気がします。勿論彼が言うように、人生の先達のところにも見えざる生命のバネは働いているわけです、そのバネに基づいて生きていくし、そうした経験に基づくことよって適切なアドバイスも生み出されてくるのです。しかし、そうした人と人との事実、具体的な関係において助け・助けられるという問題がキエルケゴールにおいては見えてこないような気がします。言い換えるならば、彼が扱う人間は、いわば具体的な関係において生きているという感じがしない、個々に孤立する者という匂いを濃厚すぎるほど漂わせているのですから。

このことは次の章で詳しく取り扱うとして、少しばかり先に進みすぎたようです、話を元に戻すことにします。以上述べてきたことが、A自身に、また、A自身を通してAの両親に、また、AとAの家族を通して私たちの世界、「世間並み」でよしとする世界にむけてこの事件が現実的に提起した、さらにこれからもずっと提起し続ける問題性なのではないでしょうか。このような意味で、この事

件は現在遠い彼方にただ忘れ去られただけにすぎず、その後、場所と時間こそ違え繰り返して起こってきたし、またこれからもまた、どこかで必ず起こってくるのではないのでしょうか。

〈注〉

- (1) 原典訳記念版『キェルケゴール著作集 十二卷』(創言社)。二四一〜五頁、『死に至る病』(岩波文庫)、四六〜五二頁。
- (2) 辻 厚治『状況への視座』(同上)、一九九〜二二一頁
- (3) 本多勝一編『子供たちの復讐』(朝日文庫)、三六〜七頁
- (4) 同上、六一、七二頁
- (5) 同上、八三頁
- (6) 同上、一六七頁
- (7) 同上、一五五〜六頁
- (8) 同上、一三七、一四七頁
- (9) 同上、二七、七七頁
- (10) 同上、一六八頁
- (11) 同上、二〇八〜九頁
- (12) 同上、五五頁
- (13) 同上、四二〜三頁
- (14) 同上、一七九頁
- (15) 同上、四二頁
- (16) 同上、三三〜五、四三〜六頁
- (17) 同上、六二頁
- (18) 同上、五五〜六頁
- (19) 原典訳記念版『キェルケゴール著作集 十二卷』(創言社)、八〇頁。キェルケゴール『死に至る病』(岩波文庫)、三三頁。
- (20) これは教師やカウンセラーになることを希望している学生たちだけにかかわることではありませんが、さしあたって教育・心理系統の教育の根幹に突きつけられた問題だといえるでしょう。
- (21) キェルケゴールが「絶望」という病を取扱うとき、例えば具体的な場面でいえば、私にとって或る誰かの死、裏切り、誰かへの失恋などを考えていたはずですが、またたとえ、絶望していることを本人が意識していない形での絶望であったとしても、私が他の人や物との関わりの中で生かされていること、そうした関わりの中で「絶望」という病も起こってくるのだということは当然分かっていて、彼が述べるように「絶望」から癒される、解き放たれる、立ち直るといえることは確かに個々の人における孤独な営みであり、またそれは同時に人の力を超えた神との繋がりなしにはなしえない問題であるとしても、他の人や物によって補われ、支えられ、助けられるということをどこか脇に置いたままで、神に支えられている個という場面にのみ焦点を合わせ分析していくことになれば、「絶望」という病から立ち上がろうとする孤独な営みですら、私たちはそれとはなしえない

いのではないのでしょうか。